



めいおんの会

名古屋音楽大学に赴任して…

名古屋音楽大学 特任教授 森 勢津子

3月に名古屋市の教員を定年退職し、4月から教職指導室に勤めています。私は「小学校音楽専科教諭」として採用され、学級担任も経験したものの、ずっと小学校に勤務してきました。「小学校勤務の経験しかない自分にこの仕事が務まるのだろうか」という不安がありましたが、大学での仕事が始まってみると、自分の存在意義は「学校現場を経験したことそのもの」であること、小中の違いはあれど、教育の根幹は変わらない、ということに今更ながら気付かされました。

音楽科や道徳科の模擬授業が始まると、教職指導室には入れ替わり立ち替わり学生たちがやってきます。「指導案をどうやって書けばいいかわからない」と悩んでいた学生が指導を受けるうちに「音楽の授業が楽しになった」と目をきらきらさせる瞬間。講義では見えにくかった「先生になりたい」という強い気持ちを会話の中に感じる瞬間。音楽だけでなく、教科化された道徳科の指導で、「先生、道徳の授業って面白いね」と言ってくれる瞬間。これらは長年教員という仕事に携わってきた自分にとっての大きなやりがいです。

私の思いつかなかったようなアイデアを考えてくる学生、「先生、来週の模擬授業に向けて、友達と一緒に『模擬・模擬授業』やるんだよ」と楽しそうに語る学生の意欲に驚かされることもあります。学生たちは演奏を始めとする自分の専門分野を抱えつつ教職の講義を取っており、「大変だけど頑張っているんだなあ」と感心します。

先生になることは人生の全てではないけれど、「先生」という仕事に少しでも魅力を感じ、やがて教員として私たちの仲間となる学生が一人、また一人と巣立っていくことを楽しみに、学生の支援をしていきたいと思います。

私自身もまた、オペラを上演する団体に所属しているのですが、演奏活動が続けることとこの仕事とを両立させながら、学生とともに学んでいきたいと思っています。

「木管楽器の楽しみ」

名古屋音楽大学 教授 橋本眞介先生をお迎えして

橋本先生は素敵な演奏を交えながらクラリネットにまつわる数々のお話をしてくださいました。

第1部

歴史

クラリネットはもともと庶民の楽器でしたが、モーツァルトが好み、協奏曲を書き上げたことで有名になり宮廷楽器として使われるようになりました。その後、オーケストラの重要なパートとして進化を続け、高音域から重低音域に至るまで様々な種類のクラリネットが誕生しました。

また、軍楽隊では野外演奏のためにメタルクラリネットが開発されました。



楽器と共に

小学校の頃、ジャズ好きの父の影響を受け、テレビで見たベニーグッドマンに憧れました。聴いた曲をリコーダーで吹いていましたが「やりたい」という気持ちが募り、父にプラスチック管のクラリネットを買ってもらいました。最初に購入した楽譜は「魅惑のクラリネット100選」。

吹くことを「楽しい」と感じながら高校、音楽大学へと進みました。



吹奏楽コンクール

聖地が東京普門館の頃はホールの構造上、金管楽器と打楽器を中心に大音量で響かせる演奏が上位を占めていました。名古屋センチュリーホールに変わってからは音色や音質が重視されるようになりました。

クラリネットはリード選びが重要で、良いリードに出会うと音色が良くなります。音色が良くなることでやる気が増します。ぜひ子どもたちには複数枚のリードを与えてください。



キャロリネット

オーケストラのファン感謝デーやワークショップで披露します。歌口に指穴を開けたニンジン（ニンジン）を接合して演奏します。

ファンの前で音程を調整しながらニンジンに穴を空けるので楽器の構造の勉強にもなります。以前は国産ニンジンを使っていましたが中国産の方が使い勝手が良く安価です。自分なりに考えたファン獲得の技です。洗濯竿を使うこともあります。

第2部

「情報交換会」



第2部は小中に分かれて情報交換会を行いました。小学校では「楽しさ」をキーワードに授業の導入や学習環境について話し合いました。導入では「音楽は遊びの延長」と感じるわらべ歌や音楽遊び、心をほぐすリトミックなど、環境づくりでは、大声ではなく音楽による指示、ハーモニーを実感するコの字型の合唱隊形、人との関わりを大切にしたい学習活動などの実践が紹介されました。

中学校では合唱コンクールと授業との関わり方について話し合いました。伴奏者の不在や力量不足に対する解決方法、パート練習を効率よく進めるための教材づくりなどの実践が紹介されました。